

臨床看護学・助産学専攻科

1 構 成 員

	平成 26 年 3 月 31 日現在	
教授	3 人	
病院教授	0 人	
准教授	2 人	
病院准教授	0 人	
講師（うち病院籍）	4 人	(0 人)
病院講師	0 人	
助教（うち病院籍）	7 人	(0 人)
診療助教	0 人	
特任教員（特任教授、特任准教授、特任助教を含む）	1 人	
医員	0 人	
研修医	0 人	
特任研究員	0 人	
大学院学生（うち他講座から）	18 人	(0 人)
研究生	0 人	
外国人客員研究員	0 人	
技術職員（教務職員を含む）	0 人	
その他（技術補佐員等）	3 人	
合計	38 人	

2 教員の異動状況

森 恵子（教授）（H25.4.1～現職）

佐藤 直美（教授）（H9.8.1～H18.3.31 助手；H18.4.1～講師；H23.10.1～准教授；H25.4.1～現職）

久保田 君枝（教授）（H17.4.1～H25.3.31 准教授；H25.4.1～H26.3.31 退職）

千々岩 友子（准教授）（H25.4.1～現職）

武田 江里子（准教授）（H21.4.1～H25.9.30 講師；H25.10.1～現職）

中川 理恵（講師）（H21.4.1～H26.1.31 退職）

倉田 貞美（講師）（H18.6.1～現職）

宮城島 恭子（講師）（H14.1.1～H17.3.31 助手；H17.4.1～現職）

安田 孝子（講師）（H16.4.1～現職）

河島 光代（助教）（H21.11.1～現職）

杉山 琴美（助教）（H16.4.1～現職；H26.1.6～H26.3.28 産休）

牧野 公美子（助教）（H18.4.1～現職）

坪見 利香（助教）（H19.4.1～現職）

田坂 満恵（助教）（H22.4.1～現職）

足立 智美（助教）（H16.4.1～19.3.31 助手；H19.4.1～現職）

都築 弘典（助教）（H25.4.1～現職）

木村 幸恵（特任助教）（H25.4.1～現職）
 村上 静子（教務補佐員）（H21.4.1～H26.3.31 退職）
 佐藤 裕紀（教務補佐員）（H21.4.1～現職；H25.10.15～産休・育休中）
 野澤 園子（教務補佐員）（H25.11.1～現職）

3 研究業績

数字は小数2位まで。

	平成25年度	
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	12 編	(7 編)
そのインパクトファクターの合計	3.65	
(2) 論文形式のプロシーディングズ及びレター	3 編	
そのインパクトファクターの合計	0.00	
(3) 総説数（うち邦文のもの）	0 編	(0 編)
そのインパクトファクターの合計	0.00	
(4) 著書数（うち邦文のもの）	7 編	(7 編)
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	0 編	(0 編)
そのインパクトファクターの合計	0.00	

1. 原著論文（当該教室所属の者に下線）

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Kimie Kubota, Hiroaki Itoh, Mitsue Tasaka, Hatue Naito, Yoshiharu Fukuoka, Keiko Muramatsu, Yukiko Kobayashi Kohmura, Kazuhiro Sugihara, and Naohiro Kanayama: Changes of maternal food intake, body weight and fetal growth through pregnancy in pregnant Japanese women J Obstet. Gynaecol. Res. vol.39, No.9 : 1383-1390, September 2013. (IF:0.84)
2. Kurata S, Ojima T: Knowledge, perceptions, and experiences of family caregivers and home care providers of physical restraint use with home-dwelling elders: a cross-sectional study in Japan, BMC Geriatrics, 14; 39, 2014.3. (IF:1.97)
3. Takako Yasuda, Toshiyuki Ojima, Mieko Nakamura, Akiko Nagai, Taichiro Tanaka, Naoki Kondo, Kohta Suzuki, Zentaro Yamagata: Postpartum smoking relapse among women who quit during pregnancy: cross-sectional study in Japan. J Obstet Gynaecol Res doi:10.1111/jog.12098. (IF:0.84)
4. 武田江里子, 小林康江, 加藤千晶: 産後1ヵ月の母親のストレスの本質の探索 テキストマイニング分析によるストレス内容の結びつきから, 母性衛生, 54 (1), 86-92, 2013.
5. 武田江里子, 小林康江, 弓削美鈴: 産後の母親の不安に対する看護者の意識的かわり 看護者は産後の母親に対して不安に関する何を話しているのか, 日本看護研究学会雑誌, 36 (4), 11-18, 2013.

6. Eriko Takeda, Yasue Kobayashi : The development of a maternal caregiving system: Based on changes in the attachment-caregiving balance scale up to 6-7 months postpartum, Journal of Japan Academy of Midwifery, 27 (2) , 237-246, 2013.
7. 牧野公美子, 鈴木みずえ, 菊地慶子, 木本明恵, 中込敏寛 : タクティールケア実践者のケア肯定感の因子構造とその関連要因, 日本認知症ケア学会誌, 12 (2), 354-366, 2013.
8. Rika Tsubomi, Sakie Omi: The present condition of an outpatient nurse's match- When the child of a developmental disability consults -, The Asian Journal of Disable Sociology, 13, 65-77, 2013.

インパクトファクターの小計 [3.65]

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. 宮谷恵, 大見サキエ, 宮城島恭子 : 教員からみた学士課程における小児看護学実習の現状-実習形態と情報収集を中心に-, 日本小児看護学会誌, 68-74, 2013.
2. 大見サキエ, 坪見利香, 岡田周一, 本郷輝明, 河合洋子, 金城やす子, 宮城島恭子, 鈴木理恵子, 濱中喜代 : 全国調査にみるがんの子どもの教育支援に関する医師の取り組みの現状-家族・看護師・学校教員との連携を中心に-, 日本小児血液・がん学会雑誌, 50 (4), 598-606, 2013.
3. 鈴木和香子, 大見サキエ, 坪見利香, 特別支援学校の看護師の役割遂行上の困難感とその対処 - 医療的ケアにおける教員との協働確立に向けた検討 -, 日本小児看護学会誌, 23 (1), 8-14, 2014.

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. 今井芳枝, 中川美砂子, 雄西智恵美, 板東孝枝, 近藤和也, 森恵子, 丹黒章 : リンパ浮腫未発症の乳がん術後患者におけるリンパ浮腫予防行動の実態, The Journal of Nursing Investigation, 12-23, 2013.

(2-1) 論文形式のプロシーディングズ

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 倉田貞美, 牧野公美子, 村上静子, 他: 一般病院における認知症高齢者への不必要な身体拘束防止の取り組み, 看護師の認識および身体拘束実施状況の変化に関する量的検討, 日本認知症ケア学会誌, 12 (4), 763-772, 2014.

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. 大見サキエ, 高橋由美子, 佐鹿孝子, 坪見利香, 宮城島恭子, 石田寿子 : 学生が子どもの立場に立った看護が実践できるようになるプロセスの妥当性の検討 (1) -4 年制看護大学生を対象

とした質問紙調査, 小児看護, 37 (2), 246-253, 2014.2.

2. 高橋由美子, 大見 サキエ, 坪見 利香, 学生が子どもの立場に立った看護が実践できるようになるプロセスの妥当性の検討 (2) 看護専門学校生を対象とした質問紙調査, 小児看護, 37 (2), 256-260, 2014.

(2-2) レター

(3) 総 説

(4) 著 書

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 森恵子:リハビリテーション看護の特徴, 雄西智恵美, 秋元典子 (編集), がん看護, 南江堂, 東京, 235-239, 2013
2. 森恵子:食道がんで食道切除術をおよび食道再建術を受けた患者の看護, 雄西智恵美, 秋元典子 (編集), がん看護, 南江堂, 東京, 259-262, 2013
3. 倉田貞美, 松井順子, 柴本千昌, 井ノ口佳子:在宅要介護高齢者への転倒・転落予防, 鈴木みづえ (編), 転倒・転落予防のベストプラクティス, 南江堂, 東京都, 87-111, 2013.
4. 倉田貞美, 尾島俊之:高齢者社会福祉, -般社会法人日本家族計画協会公衆衛生委員会, 保健指導ノート 2014 公衆衛生の現状, 一般社会法人日本家族計画協会, 東京都, 10・5-10・12, 2013
5. 坪見利香, 尾島俊之:その他の疾病対策, 一般社団法人日本家族計画協会公衆衛生委員会, 保健指導ノート 2014 公衆衛生の現状, 一般社団法人日本家族計画協会, 東京都, 9・4~9・12, 2013.
6. 坪見利香, 第2部わが子の行動が気になったらすべきこと, 7章医療機関の受診の仕方, 水野智美, 徳田克己編, 「うちの子、ちょっとヘン?」発達障害・気になる子どもを上手に育てる 17章 親が変われば, 子どもが変わる, 福村出版, 東京, 36-41, 2014.

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの (学内の共同研究)

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの

1. 大見サキエ (岐阜聖徳学園大学), 河合洋子 (宝塚大学), 近藤恵 (天理医療大学), 石田寿子 (天理医療大学), 加藤千明 (常葉大学), 金城やす子 (名桜大学), 坪見利香, 平賀健太郎 (大阪教育大学), 宮城島恭子:ルネ A・フェスラー著/大見サキエ, 河合洋子監訳:アリシア (Alicia's Updates) がんを克服した母娘からのメッセージ, 幻冬舎ルネッサンス, 東京, 2014年3月.

(5) 症例報告

4 特許等の出願状況

	平成 25 年度
特許取得数 (出願中含む)	0 件

5 医学研究費取得状況

(万円未満四捨五入)

	平成 25 年度
--	----------

(1) 文部科学省科学研究費	9 件	(710 万円)
(2) 厚生労働科学研究費	1 件	(0 万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0 件	(0 万円)
(4) 財団助成金	1 件	(300 万円)
(5) 受託研究または共同研究	0 件	(0 万円)
(6) 奨学寄附金その他（民間より）	0 件	(0 万円)

(1) 文部科学省科学研究費

1. 森恵子（代表者）基盤研究（C） 集学的治療を受ける食道がん患者に対するがんリハビリテーション看護プログラムの構築, 70万円（継続）
2. 千々岩友子（代表者）研究活動スタート支援 精神科デイケア導入期における看護支援モデルの開発, 50万円（継続）
3. 杉山琴美（代表者）若手研究（B） 多胎妊娠を告げられた女性の看護実践モデルの構築, 0円（継続）
4. 宮城島恭子（代表者）若手研究（B） 小児がん患者の周囲の人との疾患に関するコミュニケーションを支えるための基礎的研究, 60万円（継続）
5. 坪見利香（代表者）基盤研究（C） 自閉症スペクトラム障害をもつ子どもと家族への看護実践力向上を目指した基礎的研究, 130万円（新規）
6. 久保田君枝（代表者）基盤研究C 低出生体重児の増加および体重増加に及ぼす妊婦の栄養状態に関する縦断的研究, 120万円（継続）
7. 武田江里子（代表者）挑戦的萌芽研究 母親の養育者としての発達に関する研究—「愛着-養育バランス」尺度の活用—, 65万円（継続）
8. 安田孝子（代表者）, 久保田君枝, 尾島俊之 挑戦的萌芽研究 母親の清潔なおしゃれ意識とチャイルド・マルトリートメント予防に関する新機軸研究, 84.5万円（継続）
9. 足立智美（代表者）若手研究（B） 子宮頸部異形成患者の看護実践モデルの構築に向けて, 130万円（継続）

(2) 厚生労働科学研究費

1. 小山真理子（代表者）, 森恵子（研究分担者） チーム医療の時代の看護基礎教育の内容と方法の充実に関する研究（継続）

(3) 他政府機関による研究助成

(4) 財団助成金

1. 佐藤直美（分担者）ヒト発がん遺伝子多型, 喫煙との関連-全ゲノム網羅的解析による遺伝子変異と非喫煙者肺腺がんリスクの関連解明- 財団法人喫煙科学研究財団 300 万円（継続）
代表者 相村春彦（腫瘍病理学）

(5) 受託研究または共同研究

6 新学術研究などの大型プロジェクトの代表, 総括

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0 件	0 件
(2) シンポジウム発表数	1 件	0 件
(3) 学会座長回数	0 件	0 件
(4) 学会開催回数	0 件	0 件
(5) 学会役員等回数	0 件	6 件
(6) 一般演題発表数	4 件	

(1) 国際学会等開催・参加

1) 国際学会・会議等の開催

2) 国際学会・会議等における基調講演・招待講演

3) 国際学会・会議等でのシンポジウム発表

1. Keiko Mori: Experiences of head and neck cancer laryngectomees during the process of acquiring substitute voice production. 13th Hamamatsu- Kyunpook Joint Medical Symposium, Teague, 2013.9.

5) 一般発表

口頭発表

1. Rika Tsubomi, The present condition of an outpatient nurse's match- When the child of a developmental disability consults -, アジア障害社会学会第 14 回大会, 2013 年 9 月, ホーチミン市 (ベトナム)

ポスター発表

1. 坪見利香：重症心身障害児と家族の外出支援活動，アジア子ども支援学会第 5 回大会，2013 年 9 月，ホーチミン市（ベトナム）
2. Eriko Takeda : Factors Influencing Happiness toward Childrearing of Mothers with Six- to Eight-Month-Old Babies: A Model-Based Analysis Based on Health Center Intake Interview Sheets, 11th International Family Nursing Conference, 2013, 6, Minneapolis・Minnesota, USA.
3. Kurata S, Makino K, Murakami S: Case conferences changed hospital nurse's perceptions and uses of physical restraints for elder inpatients, 20th International Association of Gerontology and Geriatrics World Congress, 23-27 June 2013, Seoul, Korea

(2) 国内学会の開催・参加

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

1. 森恵子 第 33 回日本看護科学学会学術集会 実行委員
2. 森恵子 第 18 回聖路加看護学会 実行委員
3. 森恵子 日本看護研究学会 査読委員
4. 久保田君枝 日本母性衛生学会 理事
5. 久保田君枝 日本看護医療学会 査読委員

8 学術雑誌の編集への貢献

	国 内	外 国
学術雑誌編集数（レフリー数は除く）	1 件	0 件

（1）国内の英文雑誌等の編集

1. 森恵子 日本がん看護学会誌編集員

（2）外国の学術雑誌の編集

（3）国内外の英文雑誌のレフリー

9 共同研究の実施状況

	平成 25 年度
（1）国際共同研究	0 件
（2）国内共同研究	2 件
（3）学内共同研究	0 件

（1）国際共同研究

（2）国内共同研究

1. 佐藤直美，梶村春彦（腫瘍病理学），谷岡書彦（磐田市立総合病院検査科），池田和隆（東京都医学総合研究所）：喫煙行動と遺伝子多型の関連
2. 大見サキエ，高橋由美子（岐阜聖徳学園大学），河合洋子（宝塚大学），森口清美（川崎医療福祉大学），宮城島恭子，畑中めぐみ（中部大学），堀部敬三（名古屋医療センター）加藤千明（常葉学園大学），平賀健太郎（大阪教育大学），金城やす子（名桜大学），近藤恵（天理医療大学）：がんの子どもの復学支援プログラム構築のための基礎的研究

（3）学内共同研究

10 産学共同研究

	平成 25 年度
産学共同研究	1 件

1. 久保田君枝（代表者）産学連携臨床研究 乳児における斜頭症・絶壁頭の防止用具の開発—試作品の効果検証—

本研究は，企業との共同研究により，児頭の変形を予防するための臥床時の接触圧を軽減する寝具を開発し，その効果と安全性を検証することを目的とするが，今回はその第一次調査として試作品の体圧分散と減圧の効果、睡眠に伴う快適性と安全性について検証する。

結果：試作品マットは従来のマットより体圧分散効果，減圧効果があった。試作品マットの体圧分散により頭部の変形を予防できる可能性が示唆された。

（久保田君枝，田坂満恵，足立智美）

11 受賞

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 集学的治療を受ける食道がん患者に対するがんリハビリテーション看護プログラムの構築に関する研究

食道がんのために食道切除術を受けたい隠語 6 ヶ月以上経過し、術後補助療法が終了しているが外来通院中の患者 22 名を対象に、半構造化面接を行い、修正版グラウンデッドセオリーアプローチの手法を用いて分析を行った結果、食道切除術後の回復過程において術後補助療法を受けた患者の術後生活再構築過程は、《生活圏の狭小化》及び《命と引き替えに生活圏の狭小化を受け入れ自分流の暮らし方を獲得する》をコアカテゴリーとする過程として説明できることが明らかとなった。このプロセスを促進するためには、生活圏の狭小化を最小限に食い止めるための看護を、長期的、継続的に実施して行くことが必要であることが明らかとなった。この研究結果を元に、次年度からは、「集学的治療を受ける食道がん患者の「回復の実感」獲得を促進する看護実践モデルの構築」のテーマで、研究を継続する予定である。（森恵子，秋元典子¹，雄西智恵美²）¹岡山大学，²徳島大学

2. 慢性腰痛患者の痛みに対する認識・態度に関する研究

腰痛を含む痛みは主観的な体験であり、それをどうとらえ、解釈するか、どう向き合うかは個々により、また、人種や民族などによっても異なり、様々な要因に影響を受けている。痛みを体験している患者がそれをどのようにとらえ向き合っているかを明らかにすることを目的に、日本と米国で慢性腰痛患者にインタビューを実施している。今後さらにデータ数を増やし分析予定である。（佐藤直美，佐藤友紀¹，増井健二²，Rob Stanborough³）¹常葉大学，²大阪回生病院，³University of St. Augustine

3. 低出生体重児の増加および体重増加に及ぼす妊婦の栄養状態に関する縦断的研究

妊婦の栄養摂取状況からみた、妊婦の体重増加と胎児の発育状況を縦断的に調査し、低出生体重児の要因を明らかにすることにより、低出生体重児の出生を予防することを目的とする。本研究では妊娠期間を初期・中期・末期の3期に区分し、各期間の妊婦の食事をデジタルカメラにて撮影、写真から管理栄養士が栄養素別に摂取内容を分析する。さらに妊婦健診時には各時期の妊婦の体重増加と胎児の推定体重等を測定し、妊娠期間中の食事の質と量のバランスの良否と妊婦の体重増加と各期間の胎児の発育状況などを照合しながら縦断的に検証する。結果：妊婦の摂取エネルギーは推奨値を大きく下回っていることが明らかとなった。妊娠第1期の母体の栄養摂取量が妊娠期間の母体体重に関連すること、非妊時・すべての妊娠期間の母体体重が出生時体重と有意な正の相関を示した。（久保田君枝，田坂満恵，福岡欣治）

4. 在宅高齢者への身体拘束使用に対する家族介護者と在宅ケア提供者の知識，認識，および経験：日本における縦断研究

身体拘束は深刻な廃用性の機能障害を生むばかりか、尊厳を著しく脅かす人権侵害行為と認識されている。日本のみならず世界的な高齢化に伴い、在宅で介護を受ける高齢者は増加し、それに伴い高齢者への身体拘束は病院や高齢者施設のみならず在宅でも増加することが危惧されているが、在宅での実態はこれまで把握されてこなかった。在宅における不必要で虐待的な身体拘束を防止する

ための第1段階として家族介護者と在宅ケア提供者の知識、認識、および経験について調査した結果をまとめ、学術誌に投稿し掲載された。(倉田貞美, 尾島俊之)

5. 一般病院に入院する高齢者への不必要な身体拘束を解除する看護モデルの構築

多くの医療処置が実施されている一般病院では、医療処置の安全遂行のための看護対応として、身体拘束以外の方法が確立していないのが現状である。身体拘束は人権侵害となる危険性を孕んでいるので、これまでにA病院の看護部と不必要な身体拘束防止の共同研究を実施してきた。平成25年度は、研修会前後における身体拘束減少効果と看護師の認識変化の報告を投稿し学術雑誌に掲載された。平成26年度は次段階として、高齢者への身体拘束に関する看護師の認識が何を契機にどのように変化していったのか、質的技法を用いてその詳細なプロセス分析に着手する予定である。

(倉田貞美, 牧野公美子, 村上静子)

6. 認知症高齢者への身体拘束防止の包括的ケアモデル構築に向けた準備

認知症高齢者への身体拘束防止の具体的方法としてこれまで活用してきたパーソンセンタードケア等に加え、新たに認知症ケアメソッド・ユマニチュードを活用する今後の研究計画の具体的準備として、研修会へ参加した。(倉田貞美, 牧野公美子, 村上静子)

7. 小児がん患者の周囲の人との疾患に関するコミュニケーションを支えるための基礎的研究

20~30歳代の小児がん経験者13名を対象に半構成的面接を実施し、病気の受け止め方および病気を抱える自己への向き合い方が、周囲の人との関係の中でどのように変化してきたかについて、質的に分析した。今後さらに分析を深め、学会発表および論文投稿を行う予定である。(宮城島恭子, 大見サキエ, 高橋由美子)

8. 母親の清潔なおしゃれ意識とチャイルド・マルトリートメント予防に関する新機軸研究

おしゃれをしたいという気持ちは多くの女性が抱いている気持ちである。しかし、子育て中は自分がおしゃれをするよりも子どもの世話を優先しなければならない場合があり、我慢する必要がある。葛藤がある。そのような母親の気持ちに上手に折り合いをつけるのは子どもとの愛着が鍵となる。本研究の目的は、母親のおしゃれ意識と子どもとの愛着形成の関連を明らかにすること、母親のおしゃれ意識と子どもの睡眠の状態の関連性を明らかにし、家族を支援する看護の示唆を得ることである。アメリカ合衆国におけるHealth Family of Americaの家庭訪問員トレーナー研修と修復的愛着障害療法技術の研修を安田と久保田が受け、チャイルド・マルトリートメント予防のスキルを学習した。(安田孝子, 久保田君枝, 尾島俊之)

9. 母親の養育者としての発達に関する研究—「愛着-養育バランス」尺度の活用—

母親の養育者としての発達過程を明らかにし、個々の発達に応じた支援策を講じることを目的としている。開発した本尺度を乳幼児健診の場面で保健師に活用してもらい、要フォローケースとの関連からリスク群の抽出に役立つことが確認できた。さらに、活用しやすいように短縮版を作成し信頼性と妥当性を確認した。産後1か月から1歳6か月までの継続調査で、母親の養育者としての発達の特徴を明らかにし現在投稿中である。産後の育児支援として、看護者の認識調査も行い論文に掲載された。これらの結果を踏まえて、産後3か月の母親にグループインタビューを行い、求められる支援について分析している。今後は、この結果を踏まえて、具体的な支援(介入)に向けての研究を進めていく予定である。(武田江里子, 小林康江, 弓削美鈴)

10. 進行性脳卒中患者の病の体験の意味

進行性脳卒中の中でも Branch atheromatous disease(BAD)は機能予後が不良な場合が多く、患者の苦悩は非常に大きい。障害と共に生きる価値の変容、自己実現性への支援に対し看護職は大きな課題を担っている。この研究の目的は病の体験の構造の特徴や意味を見出し、脳卒中患者の生活の再構築に対する支援への示唆を得ることである。分析の結果4つの局面からなる病の体験の構造や意味が見出された。今年度はその成果をまとめ、2学会への報告を行った。今後も引き続き研究を進め、また、併行して投稿にむけた準備をしていく予定である。(河島光代)

11. 多胎児を妊娠した女性の妊娠継続に関する意思決定過程

引き続きインタビューデータの分析と調査を実施している。(杉山琴美)

12. 65歳以上の急性前骨髄急性白血病（APL）患者における QOL 評価

高齢 APL 患者の QOL と治療に伴う有害事象との関係を検証することで、患者が QOL を保ちながら治療を受けるために必要な看護方略を検討することを目的に、国内多施設で追跡調査を実施している。(杉山琴美, 竹下明裕¹⁾)¹輸血・細胞治療部

13. 認知症高齢者のエンドオブライフ・ケア充実に向けた家族ケア実践能力育成に関する検討

家族と看護師の認知症高齢者のエンドオブライフ・ケアに関する認識および看護師の家族ケア実施状況等の調査結果を、学会誌への投稿にむけて修正の作業を進めた。(牧野公美子, 倉田貞美)

14. 自閉症スペクトラム障害をもつ子どもと家族への看護実践力向上を目指した基礎的研究

自閉症スペクトラム障害をはじめとする発達障害と診断されている子どもの看護実践力向上のためのプログラムの構成を明らかにすることが目的である。養育者を通じて支援ニーズを明らかにすることに加え、子どもが受診する機会が多い診療科の外来の看護師を対象に調査を実施し、研修ニーズを明らかにするための調査手続きと一部成果発表を行った。今後調査・分析をすすめて学会発表及び論文投稿を行う予定である。(坪見利香)

15. 子宮頸部異形成患者の看護実践モデルの構築へむけて

宮頸がん検診で異常を指摘された患者への看護実践を明らかにするために、看護職への無記名自記式質問紙調査を実施し分析を行った。その結果、約9割の看護者が看護の必要性を感じていたが実際の援助は不十分だと感じている現状が明らかとなった。今後は子宮がん検診で異常を指摘された経験のある女性に対してインタビューを行う予定である。(足立智美)

13 この期間中の特筆すべき業績、新技術の開発

14 研究の独創性、国際性、継続性、応用性

15 新聞、雑誌等による報道